

宮原一武先生の思ひ出

著者	大島 和夫
雑誌名	神戸外大論叢
巻	52
号	3
ページ	1-3
発行年	2001-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001197/



宮原一武先生の思ひ出

大 島 和 夫

宮原一武先生は、1935年に長野県の千曲川沿いの上山田という温泉町にお生まれになり、若いころから大変な苦勞をしながら、勉強を重ねてこられました。ご本人は淡々と話されるのですが、私が聞くところでは、ちょっと真似ができないなという内容です。私が先生とお知り合いになれたのは、外大に就職した1978年4月からです。先生は私より3年早く赴任されていました。

かなり早い時期から、いろいろとお話を伺うようになりました。時には先生の宇治の木幡のご自宅に招待され、ご馳走をいただきながら、また縁側いっぱいに置かれていたカトレアの花を見ながら、お話を伺いました。以下に、その概略を記します。先生の家は経済的にゆとりがなかったため、少年時代には、地元の新聞に投稿して原稿料を稼いだこともあります。まず中学校を卒業すると近江絹糸紡績の工員として就職しました。当時は高卒以上でなければ社員にはなれませんでした。その後、17歳で大学入学資格検定に合格し、18歳で当時出来たての陸上自衛隊に2等兵として採用されました。その後、学資をためて同志社大学の商学部に入られました。大学生のころは British Council の館長宅に住み込んで「お抱え運転手」として働きました。大学2年生のときにキリスト教の洗礼を受けました。そしてアメリカ人の宣教師の先生のお宅に住まわせてもらって、いくらかのお手伝いをしながら、下宿代無料、英会話無料という待遇を獲得されました。学部卒業後は、日本コンデンサーに勤められ、電子部品の輸出にたずさわられました。まもなく学資をためて大学院修士課程に進学され、その後、平安女学院短大専任講師となり、

同時に、同志社大学の博士課程に進学されたのです。このようにすべての生活費と学資を自らの手で切り開かれた苦勞をうかがうと、なんの苦勞もなくぬくぬくと生活してきた自分の生き方が、とても貧しいもののよう感じられました。

ところが、先生は、そのような生活をさして「苦勞」とも感ぜず、たんと語られるのです。一方、生活態度は人一倍峻厳であり、酒も煙草もたしなまれません。健康にも注意を払い、そのために適度のテニスをされています。酒もテニスもどっぷりとのめり込みがちな私とはえらい違いと申せましょう。

先生の世界観は、もちろんキリスト教的世界観ですが、それだけでなく、現代の文明の行く末についても、深い関心をお持ちです。以下に、先生のご研究の内容について、私に理解できる範囲で述べさせていただきます。

先生は、当初、平安女学院短期大学の助教授でしたが、1975年に、神戸市外国語大学にこられてから、2001年3月まで、外大で研究と教育に携わられてきました。

先生の研究は、貿易コミュニケーションを中心とした国際ビジネスコミュニケーションの研究と、それから発展した文明の構造に関するものです。

貿易コミュニケーションは先生の中心的研究テーマであり、アメリカ商業通信文の成立過程の追跡研究と貿易コミュニケーションの機能分類とその実践科学的研究からなっています。アメリカ商業通信文の成立過程の研究は、マーチャントのメッセージ作成の意図を連絡機能のレベルとするイギリスを起源として発達した商業英語が、なぜアメリカにおいてイギリスのそれとは異なった説得機能のレベルに進化していったかを丹念に分析され、その後の貿易コミュニケーションの機能分析(連絡機能、約定機能、説得機能、説明機能、社交機能)に進まれました。この研究を深める中で、先生は、英語が国際語としてどれくらいの期間通用するものなのか、そして、過去の国際語は今までにどのような運命をたどったのかという方向に深い関心を持た

れ、文明の構造に関する一連の研究へと進化します。

先生は、文明の構造に関して、あらゆる文明は「言語と通貨」によって形成されるという仮説をたて、「国際ビジネスは、国際通貨と国際語を用いて行うが、それらの国際通貨と国際語は、文明の盛衰とともに盛衰する。アメリカドルが衰退したとき、アメリカ英語はどうか」といった問題を、文明の構造を研究するところから明らかにしようとされました。

貿易コミュニケーションのような技術論に関する分野の研究は、どうしても伝統的秩序の枠内での研究に陥りがちであるのに対し、先生が旺盛で果敢な探求精神を持たれて、新しい領域に進まれたことは、深く敬意を表します。先生が取り組んだ比較文明学は、日本の学界において必ずしも評価が定着しているわけではありませんが、先生の開拓者精神は、きっと後継の研究者たちに大きな刺激を与えることは間違いありません。

最後に、先生は、本学において長年にわたって、商業英語、国際ビジネスコミュニケーション、研究指導を担当してこられました。あるとき、先生が大量のレポートを添削されているのを見て、伺ったところ、頻繁になさっていると知って驚きました。それ以来、私も真似をして添削を行っております。ただし、日本語ですが。また、ゼミ生に対する熱心な指導と暖かい配慮も有名です。宇治の自宅に招いたり、宇治上神社（国宝です）を案内してあげたりされました。ただし、学生に尋ねると、「どこを歩いたか覚えていない。ただ、やたら歩いた。」という返事しか返ってこなかったのは、残念です。

私のゼミの生徒も、あまり記憶力がよくないので、そのときは先生の寛容の気持ちを見習うようにしています。